妙徳寺山古墳 1600年前の女王墓の発掘

「ほっとやまはく」タイム㊵

やまはく×埋文センター

山陽小野田市の妙徳寺山古墳は、厚狭盆地の南東、標高約40㍍の丘陵上にあり、眼下に厚狭川や盆地全体を望むことができます。国道2号厚狭バイパスへの進入路敷地内で発見され、1990年に発掘調査を実施しました。

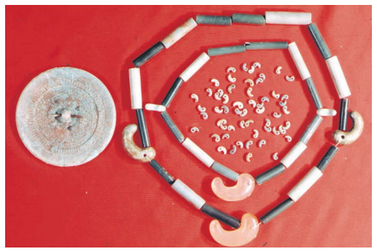
全長約30㍍の前方後円墳は、全体が雑木や雑草に覆われていました。後円部上の土を取り除いていくと、長さ2・5㍍、幅1・2㍍の範囲に集石が見つかりました。未盗掘の期待が少し高まりましたが、まだ半信半疑でした。全国の古墳の90%超は盗掘を受けています。盗掘者の勘や技術を侮ることはできません。

未盗掘古墳との出合いに興奮

石を取り除いて掘り進めると、直径30㌢ほどの白い粘土の塊が次々と顔を出し、きれいに円形に積み上げられていました。もはや未盗掘に間違いなく、調査担当者として一生に一度巡り合うことができるかどうかの幸運に興奮を抑えきれませんでした。粘土を取り除くと、ひつぎの蓋(ふた)石4枚が現れ、予想通り隙間や動かされた痕跡はありませんでした。蓋石を開ける前夜は、何度か夜回りを行いましたが、長い発掘調査歴の中でも、後にも先にもこの時だけです。

蓋石を取り除くと、鮮やかな赤が目に飛び込んできました。粘土枕に塗られた水銀朱です。死者を鎮める神聖な色とも言われています。次に棺内に4カ所ほど黒く変色した部分が見えました。細い植物の根のような塊で、人骨が残った部分に生えたものでした。粘土枕の左傍らには円形の緑色部分があり、布が付着した小型銅鏡でした。鏡から足側に向かって勾玉(まがたま)や管玉の列、枕の右側にも勾玉や管玉が集中して見つかりました。首飾りと髪飾りか腕輪とみられます。

妙徳寺山古墳全景（南から）



副葬された鏡と玉類

被葬者は若い女性か 銅鏡や勾玉が出土

最終的に、銅鏡1点、翡翠ヒスイやメノウ等の勾玉7点、碧玉等の管玉59点、全長1㌢未満の滑石の小勾玉が172個、小さな小刀1点が出土し、副葬品の特徴から、直感的に墓の主は女性だと感じました。人骨鑑定では、16～18歳ぐらいの若く骨がきゃしゃな人物で、骨の残りが悪いため性別不明とのことですが、各地の調査により、同様の副葬品をもつ人骨は女性であることが判明しています。

ひつぎは、頭側と足側に板石を立て、両側辺には平らな石を丁寧に積み上げ、床面には小さな河原石を敷き詰めていました。石棺系竪穴式石室と呼ばれ、北部九州に特徴的に見られるものです。

厚狭川を挟んだ西約1・5㌔の丘陵上には、長光寺山古墳があります。全長58㍍の前方後円墳で、大和地域と同様、中に木棺を納める巨大な竪穴式石室が2基あり、大型銅鏡3枚等鏡が4枚、剣・刀・矢じり等の多量の鉄器や碧玉の腕輪形石製品等、大量の副葬品が見つかりました。長門地域では最古の4世紀後半の前方後円墳で、墓の主は大和政権から派遣された人物または大和と誼(よしみ)を結び、厚狭を中心に広域を治めた首長（男性）とみられます。

5世紀前半の妙徳寺山古墳は、長光寺山古墳の次またはその次の首長墓と考えられます。想像をたくましくすれば、被葬者は、霊力を認められて若くして首長に祭り上げられた巫女（みこ）で、北部九州と交流し、厚狭一帯を治めた人物とみることができます。

長光寺山古墳と妙徳寺山古墳、数十年の間にこの地域にどんな変化が起きたのでしょうか、今後に残された大きな謎です。

粘土枕と副葬品、頭骨

腕輪形石製品など 大考古博で展示 7月21日に開幕

長光寺山古墳出土の鏡や碧玉製腕輪形石製品等は、7月21日に県立山口博物館で開幕する「やまぐち大考古博」で展示されます。ぜひご覧ください。

石井龍彦（県埋蔵文化センター次長）

▽次回は21日です。

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで